

金沢文庫蔵

『長谷寺仮名縁起(断簡)』について

大 橋 和 華 *

An Introduction to "Hasedera Kana Engi"

Possessed by Kanazawa Bunko

Waka Ohashi *

はじめに

金沢文庫には『長谷寺仮名縁起』と呼ばれる断簡が所蔵されている。薄墨で書かれた巻紙の書状の反古に濃い墨で称名寺の僧全海が一四世紀前半に写したもので、説教用のメモとして書写したものと思われる。

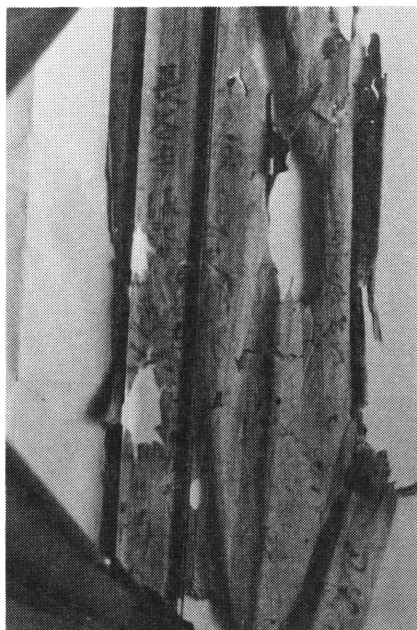
これについては永井義憲氏が『新典社善本叢書2、長谷寺験記』（昭和五三年一〇月二五日出版）の解説で、「金沢文庫の蔵書中に『長谷寺縁起抄』と假題した全海手沢断簡一葉があるが、験記の中からの抜抄であり、流布本と比較して本文の出入は僅少である。」と解説されている程度で、細部に渡った紹介及び研究は見られない。

この断簡が僅かな部分の切れ端しにすぎないことが注目されることのなかった原因であると思われるが、書写した全海和尚の生存・活躍した時代が金沢文庫に残る古文書によって一四世紀前半と断定出来る点、又、全海の書写態度が、メモ程度の軽い気持ちで原文をそのまま、書写しているものと思われる（断簡には二話の後半と前半が残っているわけであるが、その継ぎはぎ部分が何の作為もなく、「近比」という原文がそのまま残っている。二話を一続きに書きながら、内容を一続きのものにしようとした作為がない。永井博士が「験記からの抜抄」と言われたのもこの点であろう。）、原文に意図的な改変が行われたとは思われない点、残存伝本の少ない『長谷寺験記』にとって、一四世紀前半に存在した一本を考える上に意味のある断簡ではないかと思われる。特に、ここに断片として残る二話は共に『三国伝記』にとられているものであり、『三国伝記』と『長谷寺験記』の書承関係を考える上でも貴重である。

一、本文

まず本文を紹介しよう。○印は改行の位置である。㊦の記号は次章の表に対応する。

成海来^テ申ケルヤウ努^ク歎^クヲ^ハシメスコトナカレ御嬢妊^ハ姫宮^ヲ。○此山^ノヲク瀧蔵山^ニ一人^ノ尼アリ日天子ト、ツキテ高貴^ノ。○男子^ヲ生^ス此^ニカナラス取りカヘタテマツラント



包み紙

云トヲヤシメシテ○ウチヲトロカセ給ヌタノモシク思給ケレハ
 一夜御コモ○リニテ還御ハタシテ同五季五月十八日若宮○御
 誕生アリ近衛院コレナリ云々○<sup>（七以上縁記
 話部分）</sup>又云近比当寺勝永房阿
 闍梨行圓ト云人アリケリ○天禄二年七月一日ノ午ノヲハリニ加賀
 国白山ノ禪定ニ○マイリテ大御前ノ御マヘニ念誦侍リケレハイ
 マ、テモカノ○山ノミクリヤノ池ニタツ風情ノ仏光御寶殿ノ上ニソ
 ヒヘテ○立像ノ十一面觀自在并影向シ給コト二時計リ○阿闍梨觀
 毘シテ此神ノ十一面ノ番跡ソカシト本地ノ○感應ヲヨコフトコ
 ロニ甲斐国八代郡ヨリトテ云ハカリ○ナキケス男サキノ日ヨリ
 コモリテ同此端ヲ拝見シテ○落涙シテ御寶前ニ侍リケルヤト二同
 日申時ニワカニ○神明ツカセ給テ半時計フルイワナ、キクル
 ヒテ○件男ユヒヲ行圓阿闍梨ニサシテ詫シテ云ク○良大和武明
 白国泊瀬河玉御垣清流ル○心於洗久大法師願和二耳^②振立天振
 明天○我詞於聴給惠良大法師聴給惠○^④<sup>（以上縁記上
 話部分）</sup>



断簡

二、所見—『三国伝記』との類似—

前後が破られているため、全海が書写した全体は知る術もないが、この断簡は和紙の断片で包まれて居り、そこに「長谷寺縁起抄」と全海の筆とは別の字で書かれて居る。その下に、これより小さく二行に補助的な説明が書かれていたものらしく、そこに「仮名書」の文字が見える。何時の時代にか、今のような状態で保存した人が「長谷寺仮名縁起」と解して整理をしたものと思われ、それ以来俗に『長谷寺仮名縁起（断簡）』と呼ばれて保存されている。

さて内容であるが、『長谷寺験記』上巻第七話「宇多院除春宮御惱^ニ建立^{スル}長勝寺^ニ 交付美福門院御利生事」の後半、美福門院が長谷観音の御利生により、妊娠した姫宮を瀧藏山の尼の若宮に替えて、近衛院を出産される話」と、同じ上巻第十一話「天神成^テ神後居^ニ住^ニ當寺^ニ拔^ニ惡心之氣^ヲ 交付白山権現御影向^ニ 交^ニ後半、白山権現が長谷寺勝永房阿闍梨行円に長谷寺に自分の鎮座する坐を請う話」が、いずれもそれぞれ前半、後半が破れ千切れた形で残されている。二話とも験記においては、「付」という形で前話に続いて居り、験記に収録される以前は前話とは別の形で文献にあったかと思われる。

本文は永井博士の言われるように、現存の『長谷寺験記』と大差ないのであるが、詳細に比較してみると、流布本とも唯一の異本である長谷寺藏天正本ともかなり異同がある。傾向としては、第七話の方は流布本よりはやや異本に似ており、第十一話の方は

異本との差違がはなはだしく（天正本に無い部分が多い）、流布本の方に似ているが、語の順序に一致しない部分がある。即ち文章の作りはほぼ同じでありながら、天正本を書写したとは考えられず、流布本を書写したとしても、語の順序に異同があることは、現在の形の流布本との直接的な祖本関係には疑問が残る。

これだけなら、金沢本は短い断簡のことであり、メモ的な抜抄でもあり、細かい語句にこだわらず意をとって流布本を写したのであろうとすることも出来るのであるが、これと全く同じ話が『三国伝記』に記録（二巻一五話及び四卷三話）されているので、験記との異同がはなはだしい部分を『三国伝記』も含めて比較してみることしよう。尚、表は①長谷寺験記流布本（統群書類従本を使い、他の流布本と大きな違いがあった場合は付記した）、②長谷寺験記天正本（異本）、③金沢文庫藏『長谷寺仮名縁起（断簡）』、④『三国伝記』（池上洵一校注の中世の文学所収本を使用）の順に並べ、⑤金沢文庫藏『長谷寺仮名縁起』に於ける問題箇所は前章の本文に⑦⑧の符号によって示した。又、『三国伝記』が採用していない部分は棒線（——）で示し、他の三本の伝承過程での漏れの記号（×××）と区別した。

表一 第七話部分

① 験記流布本	努ミ	御歎キ有ル可ラス（亮汰和尚寄附本は「努ミ 思食事ナカレ」）	是ニ××
② 験記天正本	ユメユメ	ナケキ思食事 ナカレ	是ニ必
③ 金沢本縁起	努ミ	歎一ヲアシメスコトナカレ	① 此ニカナラス
④ 三国伝記			是ニ必ズ

果シテ同五年五月十八日（大日本仏教全書本は「果シテ同三年三月十八日」）
×××同五年五月十八日
⑦ ハタシテ同五年五月十八日
果シテ同五年五月十八日

表二 第十一話部分

① 験記流布本	行圓	天祿二年七月一日ノ午尅ノ終ニ	加賀ノ白山禪定ニ	念誦シテ侍リケレハ。今マデモ
② 験記天正本	行仁	天祿七年七月朔日 午刻ニ	加賀ノ白山ノ山頂ニ	念誦シテアリケレハ
③ 金沢本縁起	⑦ 行圓	① 天祿二年七月一日 午ノヲハリニ	加賀国白山ノ禪定ニ	⑤ 念誦シ侍ケレハイマ、テモ
④ 三国伝記	行円	天祿貳年七月一日 午ノ尅ニ	加賀ノ国白山ノ禪定ニ	念誦シ侍ケレバ

池ニ立ツ風情ノ頭光御寶殿ノ上ニソヒヘテ	池ニ（位置すれ） 仏光ノ（立ツフセキニテ） 御寶殿ノ上ニソヒヘタレハ	① 池ニタツ風情ノ仏光御寶殿ノ上ニソヒヘテ（※光は仏光カ）	池ニ立ツ 頭光御寶前ノ上ヘニ聳テ
トテ。云計リ無キ 下主男。	××××××××××下男	⑦ トテ云ハカリナキゲス男	

籠タル 同瑞ヲ 拝見シ(大日本仏教全書本は籠タルモとあり) 参籠シタリ 同ク此趣ヲ 見ル ⊕ コモリテ 同ク此瑞ヲ 拝見シテ コモリタルガ同ク此ノ端ヲ拝見シ	落涙シ御寶前ニ侍リケル程ニ。 Ⓐ ×××××××××××××××× Ⓐ 落涙シテ御寶前ニ侍リケル程トニ 落涙シテ御寶前ニ侍ケル程ニ	申時計リニ(a位置すれ) 申時計リニ 俄ニ 申時ニ ニワカニ 申ノ時キ計ニ
神明彼ノ男ニ詫シ給フテ。(b位置すれ)(a俄ニ)振ヒワナナキ(c位置すれ)(b半時計リ)(c狂テ) 神明ツカセ給テ 半時計アリ×××××××××××××××××× 神明ツカセ給テ 半時計 フルイワナナキクルヒテ 神明巫セ給テ 半時余リ 振ヒワナナキクルヒテ		
(位置すれ)行圓阿闍梨ニ(指ヲ)差テ 詫シテ云フ。(亮汰和尚寄附本は指ヲ行圓阿闍梨ニ差テ詫云々と指ヲが金沢本と一致) ⓐ(位置すれ)××阿闍梨ニ(指ヲ)サシテ×××云ク ユヒヲ行圓阿闍梨ニ サシテ詫シテ云ク 行圓阿闍梨ヲ 指シテ 託シテ云ク		ⓐ 心ヲ洗ヒ ⓐ 心濯フ ⓐ 心於洗久 心ヲ洗ソク
振リ立テ×××(亮汰和尚寄附本は×××××振明テ) フリ上テ××× ⓐ 振立天振明天 振リ立テ振リ明メテ		

このように見てくると、金沢文庫本『長谷寺仮名縁起』は現存する『長谷寺験記』では流布本に近く、それよりも『三国伝記』にもっと近い本文を持っていた可能性が強い。例えば

①②の「振立天振明天」は、『三国伝記』にだけ此の形が残っている。しかも験記は流布本・異本共に「振立テ」を残しているにもかゝらず、流布本の一本である亮汰和尚寄附本が「振明テ」を残していることからすると、金沢本や三国伝記の編者玄棟が見た本の方が古体を残していたと思われる。

③④の「洗久」のススグという読み方は『三国伝記』に採用（誤用）されているが、『長谷寺験記』では、流布本も異本も共にアラフと読まれている。

⑤⑥の「ニワカニ神明ツカセ給テ半時許フルイワナナキクルヒテ」の部分は『長谷寺験記』との異同が語に於ても、語順に於ても、はなはだしい部分であるが、『三国伝記』と比べると、「ニワカニ」の一語を『三国伝記』が意図的にはずしたと考えれば、「許・余」の相違を除いて、全く同文である。

⑦の部分も祖本には最初に「ユヒヲ」があつたと思われ、『三国伝記』が意図的にここをはずしたと考えれば、金沢本『長谷寺縁起』は『三国伝記』と同文である。

の如くである。

ここで私は池上洵一氏の指摘に注目したいと思う。池上氏は、池上洵一校注『三国伝記（下）』（中世の文学・昭和五十七年七月二五日刊）で、卷十一—十二話「中納言長谷雄卿事」の補注に、懺悔シテ令修放生会ヲ専行について、「底本のまゝでは「専行」の意

味がはつきりしないが、『長谷寺霊験記』には「懺悔ヲ修セシメ、放生会ヲ行フ」とある。これによれば底本は「懺悔令修、放生会ヲ行フ」とあるべきところであろう。このような文脈の取り違えが『霊験記』を直接に見ていながら生じるとは考え難い。底本の返り点や送仮名の誤謬は本書の伝流の過程で生じたものと思われる。（傍点筆者）と述べて居られる。

金沢文庫所蔵のこの断簡は、何しろほんの断片にすぎないので断定は避けなければならないが、『三国伝記』の編者玄棟は現存する形の『長谷寺験記』を見たのではなく、全海和尚の見た「長谷寺仮名縁起」に近いものを典拠としたのではないだろうか。

三、長谷寺仮名縁起について

それでは金沢文庫に所蔵される『長谷寺仮名縁起』の断簡と『長谷寺験記』の関係をどう考えたら良いだろうか。

『注』粉河寺縁起が漢文の本縁起の他に、霊験記中心の仮名縁起を持ち、又、清水寺には「河内の金剛寺に下書きと思われる未完の仮名縁起があつてこれによって、仮名縁起に先立って漢文縁起が存在していたことが実証できる」（中野玄三氏解説『杜寺縁起絵』昭和五〇年刊による）そうであるから、長谷寺にも十三、四世紀頃、菅公自筆本とされた『長谷寺縁起（文）』を漢文による本縁起とした場合、それに対立する、霊験譚中心の仮名縁起があつたと考えても良いだろう。

現に『長谷寺験記』には上巻十一話の「天神が与喜社へ慎座さ

れる話」と付話の「白山権現が愼座される話」のつなぎの部分に

「當山ハ他方ノ冥衆朝暮ニ供養ヲ延べ。我朝ノ諸神日夜ニ擁護ヲ成ト云事ハ此ノ縁起ノ意ナリ。」(傍点筆者)と、『長谷寺験記』

の編者がこの験記を縁起と解釈して編纂していたか、又は先行文献に「長谷寺縁起」なるものがあつて其れを此の験記にとつたかのいずれかであるとしか理解できない表現がある。いずれにしても菅公筆と伝えられて集大成された形の『長谷寺縁起(文)』とは別の、与喜天神や白山権現の話が入っている「長谷寺縁起」なるものが『長谷寺験記』が成立した十三世紀前半頃にすでにあつたか、成立したと考えなければならぬだろう。そして其の縁起こそ、全海が十四世紀前半に書写した『長谷寺仮名縁起』であつたと思われる。

加えて、同じ部分が『三国伝記』にも「彼山、他方、冥衆朝暮ニ供養ヲ演、我朝ノ諸神日夜ニ擁護ヲ成云事、是縁起ノ心也。」と、ほゞ同文で記載されて居り、しかもその記載箇所が、こちらは白山権現の話の最後の部分で、所載箇所がずれている点、『長谷寺験記』と『三国伝記』の書承関係を考える上で注目される。

さて、この「長谷寺仮名縁起」が其の後どうなったかについては漠として掴み難い。時代を下った近世の「長谷寺縁起」関係の資料の中に、菅公筆『長谷寺縁起(文)』と並んで『長谷寺仮名縁起』と称する文献の名前が現れる(注² 神社佛閣縁起集所載『長谷寺縁起』文化十四季十一月の八十二世実阿謹誌とあるもの、注³ 畿内社寺縁起類所載『豊山神楽院長谷寺畧縁起』享和元年二月の沙門源無謹誌とあるもの等)。これは、『長谷寺縁起』を足利尊

氏將軍五代の後の東山義政公により童蒙のために仮名文にするように言われて『長谷寺仮名縁起』が出来たと記すものであるが、内容は菅公筆とされた、いわゆる世間に流布した『長谷寺縁起(文)』の仮名書きである。特に実阿謹誌本の追記には、「本尊薩埵大悲利生靈驗之事実ハ則云「靈驗記」古書二冊別行有之」と記され、『長谷寺験記』と当時の「仮名縁起」は、はっきり別本である。

『長谷寺験記』が序文に「菅丞相勘出セシメ給ル縁起、ハ心ヲ得テ多クハ中々人ノ障ナル故ニ愚ナル者ノ為ニ假名ニ和ケテ一筆註シ侍ル也」とあることや(傍点筆者)、『粉河寺仮名縁起』と同じように三十三話にまとめられていること(下巻)等からして、菅丞相勘出と伝えられる、漢文による『長谷寺縁起(文)』に対する「仮名縁起」として編纂されたと考えられるが、これが世に「長谷寺仮名縁起」として流布したとしても、その時期はそれ程長くはなく、全海和尚が書状の反古に書写した時期から幾らも経たないうちに、『長谷寺験記』又は『長谷寺靈驗記』として名称が固定していったのだろう。至徳元年(一三八四年)の四十八代良仙僧正誌とされる『注⁴ 西国順禮縁起』には「日本無双生身の喜薩靈驗本朝ハいふにおよばず唐国迄も数多施し玉ふこと縁起、験記等に分明にして」と記されている(傍点筆者)。

最後に、金沢文庫蔵『長谷寺仮名縁起(断簡)』にとられた二話(美福門院の話、白山明神の話)に関する長谷寺関係の文献は、管見の範囲では『注⁵ 豊山伝通記』正徳三年(一七二三年)と『注⁶ 豊山縁起秘要集』寛延二年(一七四九年)があつた。しかし『豊

山縁起秘要集』の方は著しい略述で、しかも出典に『靈驗記』と『三国伝記』をあげて居り、当時すでに、長谷寺内部の者にさえも、それ以上の資料が見つけれなかったのではないかと思われる。又、『豊山伝通記』巻上の方には「行圓が白山明神を長谷へ慎座させる話」が漢文で入って居り、話の流れは『長谷寺仮名縁起（断簡）』『長谷寺験記』『三国伝記』と同じである。しかし、これも概略であり、これら三文献との直接的な伝承関係は見られなかった。『豊山伝通記』が参照した原本こそ見たいものである。

以上雑駁な紹介文に終わりましたが、この拙文を書くために、全海和尚について、金沢文庫主任学芸員の高橋秀栄氏に大変お世話になりました。全海は金沢文庫所蔵の古文書によると、一三二六年（嘉暦元年七月廿九日）「大疎鈔・決撰・惠解記等借用」より、一三四二年（暦応五年二月廿八日）「湛睿より三宝院流伝法灌頂うく」に至る記録が残されて居り、『長谷寺仮名縁起（断簡）』書写年代も、この頃と考えられます。

尚注1～6の文献所在については次の通りです。

注1『粉河寺縁起』

仮名縁起が入っているのは統群書類従

注2神社佛閣縁起集所載『長谷寺縁起』

宮内庁書陵部蔵

注3畿内社寺縁起類所載『豊山神楽院長長谷寺累縁起』

内閣文庫蔵

注4『西国順禮縁起』

諸国社寺縁起（合七冊）のうち。大阪府立中ノ島図書館蔵

注5『豊山伝通記』

大日本仏教全書

注6『豊山縁起秘要集』
内閣文庫蔵

以上